

二〇二二年六月二一日

描きかけの画架の置かる青葉影
屋号染めぬきし老舗の夏のれん
溪谷の闇に螢火交錯す
出目金の尾を翻しそつぽ向く
一筆箋添え玉葱の宅急便
背伸びして巢立まぢかのこふのとり
尺取の宙を掴んで歩みけり

なつき
もとこ
素 秀
明日香
せいじ
素 秀
みきお

二〇二二年六月一〇日

底ぬけに青き空ある水田かな
濃紫陽花伏し目がちなる六地藏
花蜜柑一山覆ふ瀬戸の島
万緑の囲みし園に滑り台

あひる
ぼんこ
凡 士
満 天

二〇二二年六月九日

進みゆく花嫁舟や花菖蒲
塩吹きし梅干しもらふ夏通路
道迷ふ夢から覚めて明け易し
夕日に帆染めてヨットの戻りけり

智恵子
なつき
たか子
凡 士

二〇二二年六月八日

賀茂の風呼び込む茶屋の青簾
ラジオ体操前屈すれば蟻の穴
沢蟹の横切るを待つ溪の道

凡 士
あひる
隆 松

二〇二二年六月七日

天井にゆるキャラ笑ふ館涼し
影涼し蕪村の句碑へ若楓
噴水もみどりに染まる森の園
換毛の犬の溜息夏初
沢蟹の庭を横切る湯宿かな

たか子
ぼんこ
満 天
邑
宏 虎

二〇二二年六月六日

梅雨の闇テールランプの赤滲む
厨窓今宵の客は雨蛙
暮鳴いて鳥語鎮もる池の朝
狂ふごと夏蝶群るる台場跡

あられ
明日香
宏 虎
せいじ

二〇二二年六月五日

緑さす櫂並木やロダン座す
天牛を掴めば指に伝ふ聲
お出掛けはデイスリーブスや白き靴
汗拭ふ香具師の顔の皺深し
新樹光浴びるテラスの今が好き

凡 士
素 秀
あひる
なつき
智恵子

毎日句会みのある選・二〇二二年六月一三日